

《授業と子ども》

ひらがなの授業 (3)

— たんご・おと・もじ —

千葉 建夫

文字の前に音がある

どの国の言語も文字の前に音があった。日本語もまた文字の前に音があり、その共通の音の一つひとつを表すためにかな文字がつけられた。五十音図は日本語の発音を組織的に整理し、文字をあてはめて見事に図式化したもので、その原型はすでに平安時代につくられているという。

単語をゆつくりと発音すると、音と音との間に切れ目ができる。一まとまりに発音される最小の単位を音節といって、音節には、核となる母音と、その前後に子音を伴ったものがあるが、五十音図では日本語の母音をまとめてア行とし、他の行は「子音+母音」でまとめてある。

これまで学んできた「ぶん」「たんご」の学習を土台にして、子どもたちは、いよいよ「かな文字」の学習に入っていくのだが、そのためには、まず、単語を音節に分解し、その音節を認識できるようにすることが大事になってくる。音節ということばは、子どもたちには「音(おと)」と教えることにする。

たんごは いくつのおとで できている？

「たんごとおと」の授業に入った。

最初、おもちゃやで見つけたリスのマスコット人形を取り出して子どもたちに見せた。それから腹話術よろしく、「ぼくは動物学校の一ねんせいです。よろしくね」

そういつて、ぴよこんと頭を下げた。すると ピッ、ピッ、ピッと音がなった。子どもたちは驚いた。実はマスコット人形のお尻の部分に小さな笛が入っていて、両脇を押すと、その度にへこんで笛がなる仕掛けになっている。

続いて「今日は、森の動物学校の教室に新しい友だちがきました。紹介します」といつて、動物の絵カード四枚(図①)を黒板にはった。それから、リスくんが「ぼくが、名前をよびます。だれをよんだか当ててください」と子どもたちによびかけた。

「最初は、『ピッ、ピッ、ピッ』です。だれでしょうか」子どもたちは耳をすまして、音をゆつくり数えている。

「わかった。『き、つ、ね。』だよ」
「そのとおり。よくわかりましたね。それでは、きつねさんの胸の名札に名前をつけてあげましょう」

う

そういつて、用意しておいた黒い円形のマグネットを胸に三

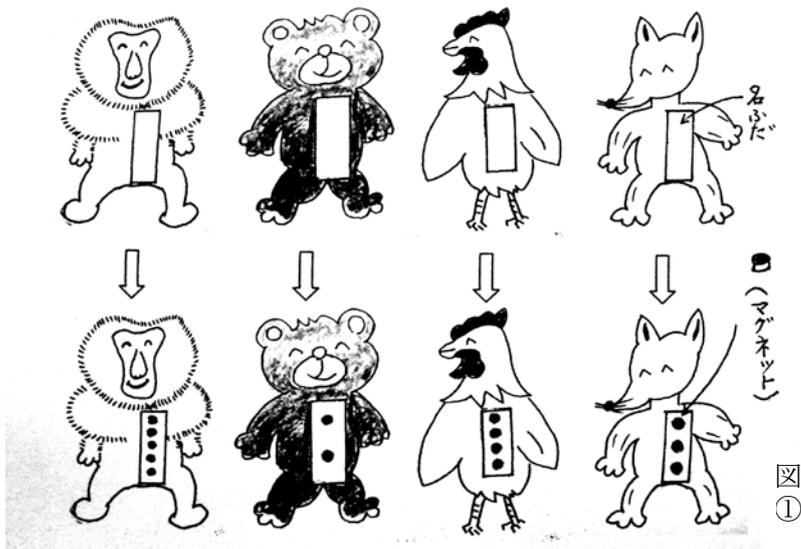


リスの人形

こつけてあげた。

「では、今度は だれかな。『ピッ、ピッ、ピッ、ピッ』」
子どもたちは集中して音を数えている。それからハイハイと元気よく手があがった。

「ぼく、わかったよ。こんどは『に、わ、と、り』です」
シュウちゃんが、ゆっくり単語を分解して発音した。



①

「よく、できました。シュウちゃん、にわとりさんに名札をつけてあげてください」

シュウちゃんは、黒板の前に出て、にわとりの名札にマグネットを四こつけ、にこにこ席にもどった。
「さあ、こんどはだれかな？」
子どもたち

は、もう方法がわかったので「かんたん、かんたん」といつて待ち構えている。

「いいですか。『ピッ、ピッ、ピッ』」

「はい、さ、る、です」

「えー、ちがうよ。く、ま、です」

「どっちもおんなじだよ。りようほう、いっしょによんだんだよ」

二つの音をめぐり子どもたちの意見は別れてしまった。

「あのね。これ、サルじゃないの。」

「あ、ゴリラなの」

「ちがうよ。ゴリラじゃない。チンパンジーだよ」

「オランウータンというのもあるんだよ」

教室が騒然となってきた。絵カードを作りながら、もしかしたら難しいかなという不安がその通りになってしまった。でも、こんなとき動物に「かわいい男の子が必ずいるものだ。今まで、黙って考えていたユウちゃんが手を上げた。」

「あのね。毛がふさふさしているでしょう。これ、マントヒビって言うの。ぼく動物園で見たもん」

ユウちゃんの自信ある説明に、一件落着。二つの音は「くま」に落ち着いた。残りは「まんとひび」という五つの音でできていることも分かった。コウちゃんも満足そうだ。

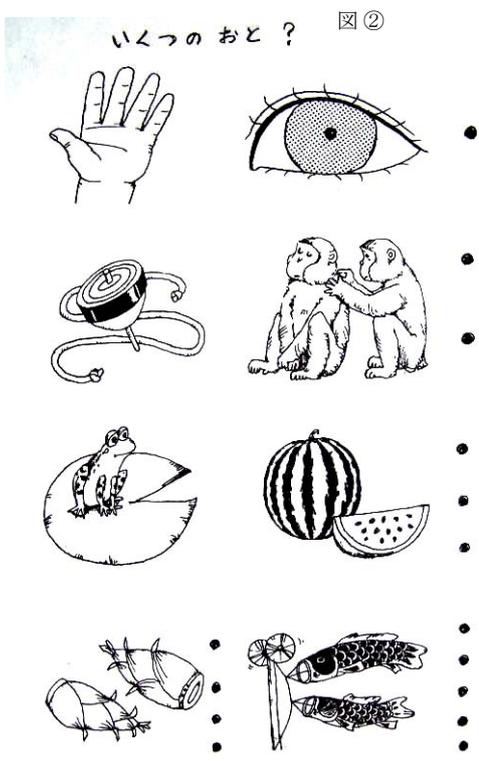
「コウちゃん、くわしいね」というと、コウちゃんは学級



文庫にあった動物絵本をもってきて、ニホンザル、ゴリラ、チンパンジー。オランウータン、マントヒヒの写真を見せてくれた。おかげでサル仲間でもいろんな仲間がいることがわかった。授業の内容とは関係がないようなまわり道だけれど、そのまわり道が子どもたちの知識をふくらませ、物事への興味を広げてくれるのだ。

動物たちの名札ができあがったあとは、もういちどリス人形の音にあわせて、動物の名前を発音してみた。口のひらきをはっきりさせて、口元に手をあて、息を感じ取らせたり、パラフィン紙を唇にあて、ピー、ピーという振動を感じ取らせたりした。こうしながら単語の中の音節の切れ目をしっかりと意識させておきたいと思った。

そのあとは絵カード(図②)をたくさん使って、ものやいきものの名前を発音して、いくつかの音になるかを確かめた。プリントやノートにはマグネットのかわりに音節の数だけ「●」を書くことにした。子どもたちは絵カードにク



レヨンや鉛筆で「●」を書きながら、一つの音でもことば(単語)があること、二つの音や三つの音になるとたくさん単語が見つかっていくことがとてもおもしろかったようだ。

えんぴつは どう もつの

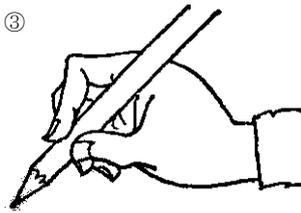
入学したての子どもたちは、「はやく勉強をしようよ」とよくいう。これまでのような学習ではなく、鉛筆で文字を書くことが勉強だと思っているらしい。鉛筆やクレヨンを持たせて、絵や図を自由に書かせていたが、鉛筆の持ち方はさまざまだった。箸や鉛筆を持ち始めたときに意識して親が教えることは少ないようで、子どもたちが自己流で覚えたものが、そのまま身についてしまっているようだ。改めて学びなおすことは難しいとは思ったが、私は子どもたちに次のように話して意識させてみた。

きれいな字を書くためにはエンピツの持ち方がだいじなのです。

- ①まず、親指と人差し指で丸をつくってごらん。その二本の指でエンピツをそっとつまんでみるんだよ。そのまま、丸や線を書いてごらん。ほら、なんとか書けるでしょう。二本の指だけでもなんでも書けるんだよ。(このかたちでいろいろ書いてみる。)
- ②でもね。すこし、ふらふらするから、中ゆびを下からそ

つとあてて、動かないようにしてあげよう。そつとね。
 ③それから、残りの指を全部中指にくっつけよう。小指のわきを、そつと紙の上のにせよう。
 さあ、これで「かまえ」ができました。

授業の中で、鉛筆を持つときは、まず、この「かまえ」(図③)をとってから、練習に入った。



図③

きれいな文字を書けるようになるためには、指のよけいなところに力が入らず鉛筆をもてること、なめらかな直線と曲線がかけること、そして、文字の形の分析と総合ができる確かな目をもてることなど種々の能力が必要とされる。

入学前の子どもたちには、草花遊び、どろんこ遊びで体全身を使ったり、あやとり、折り紙で指を使う遊びをしたり、はさみなどの道具を使ったりする生活をたっぷりさせておきたい。それが、文字を書く学習と深くかかわっていることはまちがいないのだから。

一つの音に 一つの文字を あてはめる

子どもたちが単語を音節に分解できる力がつければ、もう文字を与えてもいい。どの文字から教えるかは、学級の子どもたちがどの程度力を持っているかを調べて、工夫する

必要があると思う。子どもの文字抵抗の少ない「し」や「く」などから入る人もいるが、私は音節の構造から考えて、まずア行の母音の文字をあつかい、次に他の行に進み、あとで述べる五十音図の仕組みにたどりつくようにしてみた。

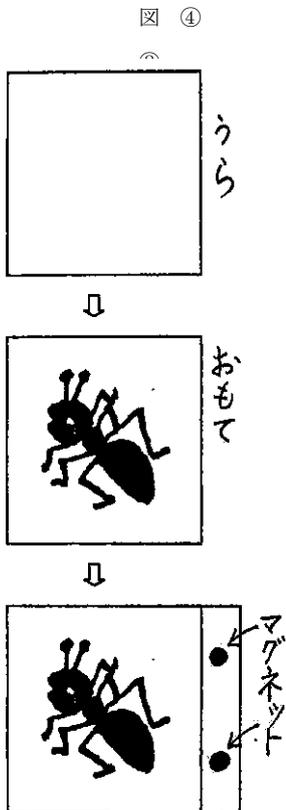
初めての文字との出会いは、「『あ』の授業」からだ。
 うらが白紙のカード(図④)を黒板にはった。

「きょうは、私はだれでしようのクイズをします。あててください。わたしは、まっくろな小さな虫です。おさとうがだいすきです」

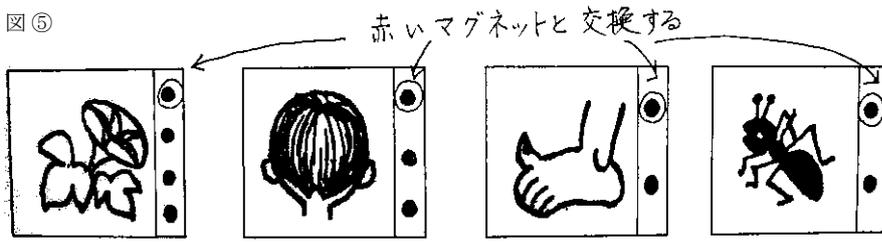
「はい、はい」、「それはね。あり。ぜったい、あ、り」「さあ、どうでしようか。(カードをめくる・ありの絵が出てくる。子どもたちの歓声。)よくできました。さて、このありは、いくつの音でできていますか?」

「あ、り、だから、2つの音です」

絵カードの右側に マグネット を ●●と置いた。



図⑤



「同じように、次の白紙を見せて」次のクイズですよ。わたしは人間の体についています。お出かけのときはいつもくつといっしょですよ」
 「くつとなかよし・・・。わかった。あしだ。あ、し」
 「さあ、どうでしょうね。(白紙のカードをめくる。足の絵が出てくる。)あたりです」

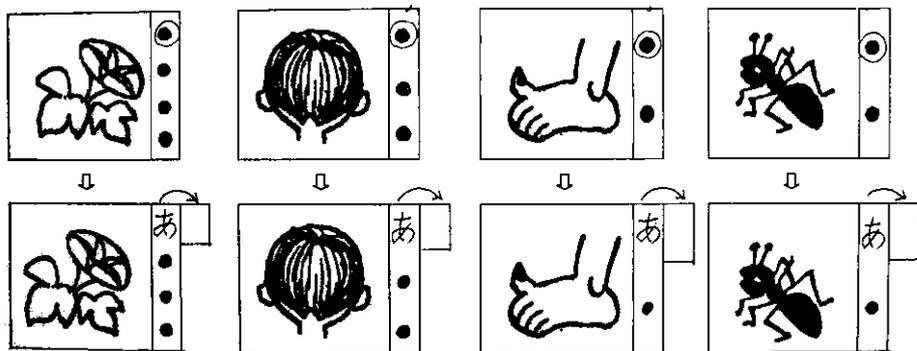
「あしは、いくつの音ですか？」
 「二つの音です」同じようにあしのカードの上に「●●」と二こおいた。
 こんな調子で、ヒントをだしたり、逆に子どもたちから、質問を出させたりして、「あたま」「あさがお」の絵カードも順にめくっていった。(図⑤)
 カードを全部開いた後で、「あり」と「あしの絵カードを比べて聞いた」
 「ありは●●で二つの音、あしも●●の二つの音です。この中に同じ音があります。どれでしょうか？」
 子どもたちは「あり」「あし」と口々に発音していたが、初めの音だとすぐわかった。そこで「ア」の音をマグネットの赤におきかえた。続いて「あたま」と「あさがお」絵カードを見せて、「これにも『ア』の音がありますか？」と聞いた。

「わかる、わかるよ。これも初めの音でしょう。これも『ア』だもん」

子どもたちは自信満々にいう。これも『ア』の音を赤いマグネットに変えた。続いて、赤いマグネットを指差して、「これは『ア』という音ですね。口を閉じていえる？」
 「むりだよ。ひらかなないと『ア』つていえないよ。」
 「どんなふうに関くと『ア』つていえるかな。やってごらん。」といって、口の開きが発音と関係することを意識させた。

続いてこの赤いマグネットの音に文字を当てはめる。
 「この(●)が、『ア』という音だとは、このままではわかりませんね。それで、だれもがわかるように、むかしの人は、ひらがなという字をつけたのです。それはこんな字です」そういって、赤いマグネットの下のカードをめくった。(図⑥)「あ」の文字が次々

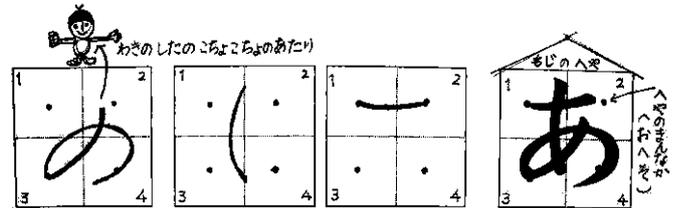
図⑥



と出てきた。すると、子どもの中から「あつ、『あ』ならぼく、しつてるよ」「あ』なんて、かけるよ」と言い出す子がでてきた。今は多くの子が入学前にひらがなを覚えてきている。分からない子は少数だろう。でも、知っている子によりかかって授業を進めると、できない子に最初から挫折を感じさせてしまうことになる。知っている子どもでも、おぼえ方もさまざままで正確ではない。だから、もういちど初心にかえしてやる必要がある。

『書ける』『書ける』と自慢する子はみんな黒板に出てきて書いてもらった。それを見て、「じょうずだね」と認めたあとで、「でもね。みんなの『あ』は、幼稚園や保育園の子どもの『あ』なんだよ」と厳しい批評をくださった。子どもたちしゅんとした。それから「一年生で勉強する『あ』は、こんなふうにかくんだよ」と、事前に練習しておいたとびきり上手な『あ』を黒板に大きく示範してみた。とたんに「すげえ」と目を丸くして驚く子どもたち。その姿は謙虚だ。「どうだい。どうしたら、一年生の『あ』」が書けるようになるか、その秘密をおしえてあげるから勉強しようね」というと、子どもたちは「うん。うん」と真剣なまなざしで答えてくる。このように動機付けができればあとは、どの子どもも同ジスタートラインにたって学習を始めることができるだろう。

方眼を四つの部屋に区切ったカードをわたして、部屋の名前をつけた。「あ」を書く順序を説明した。



3と4のへやのかべのまん中あたりに ゆみのようにたてのせんをかく。
 ③わきの下をこちよこちよとくすぐるあたりから、3のへやのおへそへうごいて、それからぐるっとちゆうがえりして、1と2のへやをとおって3のおへそへすすむんだよ。
 一年生最初の授業参観でこの『あ』の授業」を見てもらったことがある。授業はにぎやかに進んで、子どもたちの元気な「あ」が黒板いっぱい広がった。観てくれた母親が「こんなふうにして、子どもたちはかな文字を勉強するのですか」と安心したように話してくれたことを思い出す。



①1のへやのおへそから 2のへやのおへそへ、やや下にゆみのようになつたまっすぐなせんをひくよ。
 ②つぎは、1と2のへやのかべの上から